

『有効な静脈栄養を実施するために CRBSI 予防対策を！ SSR3 回法を広めよう』

7 月を一言で表現すると「**熱い、暑い**」でした。漢字で表現すると、猛暑、酷暑、激暑、炎暑、極暑という 5 つの用語があるとのこと。このほか、大暑や危暑もあるし、灼熱夜、茹暑夜という表現もあるそうです（茹暑の読み方がわかりません。じょしょ？によしょ？ゆであつ？）。文学的表現としては極暑が最上位表現だそうです。私は、酷暑が一番的を射た表現だと思いますが、いかがでしょうか。とにかく、北海道の北見が 40℃ の予想になり、その日の沖縄、那覇の最高気温が 32℃ だったという、日本地図を反対にしたいと思う気温です。外を歩く時は日傘が必需品になっています。サングラスも。調光レンズの眼鏡を購入したのですが、怖そうに見える、柄が悪そうに見える、と守衛さんに言われました。フレームの選択ミスでしょうか。とにかく暑い。日本は熱帯気候になっているような。さらに、この気温は 10 月まで続くそうです。乳牛がお乳を出さなくなり、鶏の卵が小さくなり、野菜類も枯れて。雨も降らず、宮城県のダムは貯水率がゼロになっているとのこと。地球温暖化は止められないのでしょうか。7 月 30 日、兵庫県丹波市で 41.2℃ の日本最高気温を記録しました。

7 月 20 日に参議院議員選挙が行われました。自民党と公明党の与党の議員数が過半数を切った、国民民主党と参政党が躍進、だそうです。日本の政治はこれからどうなるのでしょうか。本当に日本のことを考えている政治家がどれだけいるのでしょうか。世界を見まわすとトランプ氏が好き放題やっている。地球はどうなるのでしょうか。アメリカが関税引き上げる？日本は 15%？そんな勝手なことをしてもいいの？今まで、世界中が協力してきたのに。よくわかりませんが、変だ、というのはわかります。本当、変です。

今回は、6 月 28 日の佐賀 NST 研究会からの話題になります。久しぶりに佐賀市へ。予定では午後 2 時に着けばよかったのですが、佐賀牛のステーキを食べたい、奮発して、と思って早く佐賀市に着きました。宿泊ホテルへ行って、佐賀牛のステーキを食べる店を教えてくださいと「季楽」と教えてもらいました。電話すると、満席。待てば食べられますか？どのくらい待てばいいですか？と聞くと「わからない」との返事。諦めました。後でタクシーの運転手さんに教えてもらったのですが、季楽は中国の人でいっぱい、とのこと。諦めてよかった。近くの居酒屋さん風の店を教えてもらってステーキ弁当を食べましたが、ふつうでした。残念。その後、歩いて佐賀バルーンミュージアムへ。汗だく！途中で佐賀出身の偉人の銅像の写真を撮りました。バルーン（気球）ミュージアムはなかなかよかった。本物のバルーンフェスティバルを見たいと思いました。が、天気の影響が大きいとのこと。佐賀 NST 研究会での講演は 13 年ぶりでした。内容は「静脈栄養とカテーテル感染予防対策」でしたが、どこまで理解してくれたのだろう、という気もし



↑「7 月の熱い、暑い日」の、私の部屋からの眺望です。きれいないい天気！でも、暑い、暑すぎる、熱い、熱すぎる！

千里金蘭大学は、栄養学部と井上善文特別教授を中心に、医療の現場で栄養を管理する臨床栄養の教育に力を入れている。学外にも臨床栄養への理解を広げようと、卒業生らを対象に「臨床栄養勉強会」を立ち上げ、6 月 14 日に大阪府吹田市の同大学で第 1 回の勉強会を開いた。これからの管理栄養士は口から栄養を摂取する経口栄養だけでなく、点滴で血管に輸液を投与する静脈栄養や、チューブで胃や腸に栄養剤を投与する経腸栄養も理解しなければならないと、井上教授は呼びかけている。

卒業生らとともに考える 臨床栄養勉強会

「患者さんの状態を評価して口から食べるだけでなく、静脈栄養や経腸栄養を組み合わせた方がいかに安全に実施するのかが臨床栄養の要諦である」と井上教授は、その説明する。

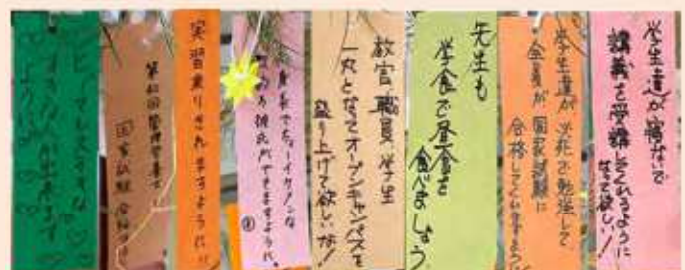
参加者からは「有意義な勉強会だった」「できるだけ経口栄養を選択するべき」と思い込んでいるものの、目からうろたえられた。「静脈栄養と経腸栄養についてもっと理解したい」という要望もあった。

千里金蘭大が学外向け立ち上げ

↑ 6 月 14 日に開催した「臨床栄養勉強会」が産経新聞の教育欄に掲載されました。そのままここに出してはいけないとのことなので、アレンジして出しました。本物はネットでも見ることができます。ネットのニュースでも見ることができます。



↑ 食堂の前の七夕飾り。大学として、七夕様に、最もお願いしたのは「**来年の新入生が 240 人以上になりますよう**！」です。



↑ 七夕の短冊。私が気に入ったものを出してみました。左の 4 枚は学生達の切実な願いでしょうね。右の 4 枚は、誰が書いた？ハハハハハ。大学としての？私の？切実な願いです。

ました。翌日は好生館の山内先生と一緒に吉野ヶ里遺跡へ。2回目でしたが、今回は真夏(前は冬)。この日の佐賀市は36℃。帽子も日傘もなし。講演の時の服装で歩き回りました。山内先生はこの日にピッタリの半袖ポロシャツ(ミヤクミヤクのロゴ入り)、短パン、帽子、でした。私は、扇子は持っていましたが、暑い、熱い、でした。よく倒れなかったなあ、かもしれません。

7月11日は横浜での環境感染学会へ。ポスター発表をしました。この歳になってポスター発表？私のポスターはA4に印刷したものを貼ったのですが、周りの方達はほぼ全員が大きな1枚ポスターでした。気楽に、**SSR3 回法(Needleless connectorの新しい消毒方法)**について発表してきました。私の隣のポスターは、愛媛県西宇和郡伊方町出身の看護師さん。会いたかった！と言っていました。一緒に記念写真を撮りました。地方(同じ町内)出身者同士です。その夜はやっぱり牛鍋。今回は荒井屋。うまかった！食べている間に横浜は線状降水帯で大雨。マンホールから水が噴き出して大変だったのです。

大学は、前期が終了。試験も終わりました。全員合格？そんなはずがないでしょう？私の講義は3年生なので、単位を落としても来年がありますからね。ちょっと気楽？いろいろ……です。7月20日と27日はオープンキャンパス(オーキャン)。高校が夏休みに入っているので、大学も力が入っています。私？オーキャンの教官としての出席者リストには載っていませんが、毎回、参加。皆勤賞！少しでも役に立つなら、と思っているのですが、本当は何の役にも立っていないかも。文句ばかり言う、と思われているかもしれません。病院で働く管理栄養士になりたいと思って千里金蘭大学を目指している生徒さんに会いたいのですが、なかなか会えません。でも、せっせと営業活動をしています。一人でも多くの生徒さんに、千里金蘭大学栄養学部へ来て欲しいので。今年の七夕飾りにも「来年の新入生が240人以上になりますよう！」と書きました。240人が3学部の定員なんです。**来年は、250人でもいい**ですよ、平川副理事長！ついでに「寝ないで講義を受講してくれるようになって欲しい！」との短冊も書いたのですが、渡辺先生に「誰が書いたか、わからないでしょう？」と言ったら「すぐにわかります」と即答。「そういうことを考えているのは、この大学では井上善文しかないから」だそうです。願いが叶うはずの七夕の短冊のはずだから、後期の講義ではきっと……。



↑大学の掲示板でサンケイ新聞の記事が紹介されたのですが、見えない！サンケイ新聞に遠慮したのだと思いますが、マロニーのレシピコンテストも実施中です。M1(マロニー)グランプリです。吹田市のマロニー株式会社と千里金蘭大学が協力しての、レシピコンテストです。栄養学部の梅本先生ががんばっています。8月9日に最終審査があります。近隣の高校も参加してくれています。もっと大学全体で盛り上げて欲しいと、私は思っています。栄養学部だけのイベントではありません。千里金蘭大学全体としてのイベントのはずです。



↑見えない大きさだった新聞記事が、大きくなりました。アドミッションセンターの藤崎さんが工夫してくれました。これで、オーキャンの時にも参加してくれた生徒さん、ご父兄にも宣伝できます。こういう**レベルの高い教育**をしています、これが、「**本来の大学の売り**」だと思います。



↑オープンキャンパスの様子です。今回はたくさんの生徒さんに来ていただきました。私も、参加してくれた生徒さん、親御さんに、病院で働く管理栄養士のやりがいなどについて説明しました。熱心に聞いてくれた家族もありました。森永乳業クリニコの製品の試飲・試食もしていただきました。全員が「おいしい！」と言ってくれました。盛り上がったんじゃないかなあ。大学として、栄養学部として、教官は一生懸命にやっています。大学の学生にもっと手伝って欲しいのですが、残念なことに、タイミングが悪い。前期試験中なんです。次のオープンキャンパスの8月9日には大勢の学生に手伝って欲しい！私としては「私、臨床栄養の領域では結構有名なんですよ。スマホで井上善文と検索してみてください」などと**営業活動**をしています。この私が、営業活動をしている……！！



ゼン先生：先生、7月も暑い、熱い、です。異常な暑さです。この熱さ、どうなるのだろう、という感じです（気温には「暑い」を使い、物には「熱い」を使うのですが、「熱い」のほうが現在の気温を表現しているような気がします。空気という「物」が「熱い」のですから）。日傘無しでは歩けません。車の中は50℃以上になっていると思います。

小越先生：ひどい暑さだよな。いつまで続くんだろう。

ゼン先生：予想では10月まで続くそうです。秋も暑いんです。

小越先生：秋は涼しいはずだが。

ゼン先生：もう、そういう、ふつうの四季に対する考え方をしはいけないんですよ、きっと。

小越先生：そうなってしまっているんだろう。

ゼン先生：熱中症で倒れる人がものすごい数です。北海道ではエアコンがない家がたくさんあるとのこと。北見で40℃近くの気温になったんですから。

小越先生：北見で40℃だって？異常だよ。

ゼン先生：滋賀の小学校では、プールサイドに約5分間座っただけでお尻に62人が軽いやけどしたらしいです。

小越先生：へええ。そんなに熱いんだ。

ゼン先生：滑り台でのやけども報道されていました。

小越先生：ひどいな。ふつうに生きていけないじゃないか。

ゼン先生：本当に困ったことです。

小越先生：何か、いい話はないのか？

ゼン先生：話は変わりますが、6月に千里金蘭大学で開催した臨床栄養勉強会を産経新聞が教育欄に取り上げてくれました。

小越先生：そうか。それはよかった。どういう記事だったんだ？

ゼン先生：予想よりいい記事でした。静脈栄養と経腸栄養も必要だ、という内容でした。記事を読んでください。

小越先生：満足いく内容だったんだな。

ゼン先生：はい。ありがたいことです。3代前の第一外科の教授、川島康生先生から手紙をいただきました。

小越先生：あの川島先生か。御年94歳だろう？

ゼン先生：そうです。サンケイ新聞の記事を読んだ、がんばっているな、です。

小越先生：それはうれしいことだな。

ゼン先生：はい。本当に感動しています。しかし、千里金蘭大学の広報が下手ですから、学内ではほとんど知られていないようです。

小越先生：へええ、それは残念だ。大学にとっても、学生集めのいいネタになるのになあ。

ゼン先生：広報のアドミッションセンターに文句を言ったら、藤崎くんが大きく拡大した記事を掲載してくれました。

小越先生：そうか。言われなくてもするべきだよな。

ゼン先生：その通りです。私がアレンジした記事はカラーで新聞名も入れているんです。

小越先生：その勉強会は次回もあるんだろう？



↑ 食堂前には大学の活動内容などを展示しています。教育学部の展示はかわいい！栄養学部は、調理室などが離れているので、展示しにくいのです。でも、いろいろ工夫しています。アドミッションセンターの藤崎さん達ががんばっています。



↑ 横浜です。今年はまだ3回目の横浜です。景色は見慣れたものになっているんですけど、でも、来たからには写真を撮らなくては、です。この景色もいいですね。横浜は大都市！です。



↑ 環境感染学会のポスター発表会場です。ごらんのように、私はA4に印刷したものを貼っただけなんですけど、たぶん、全員ですが、一枚物です。気合が入っている！もちろん、私も気合を入れてポスターを作りましたよ。おまけとして、SSR3回法の実際の動画を見てもらいましたから。P1-065が、私と同郷の看護師さんの発表です。愛媛県西宇和郡伊方町出身の医師と看護師のポスターが隣り合わせになる・・・なんていう偶然でしょうか。

ゼン先生：はい。10月18日に第2回を開催します。

小越先生：そうか。楽しみだな。それじゃあ、今回のネタは何なんだ？

ゼン先生：前回のお約束通り、静脈栄養とカテーテル管理です。

小越先生：そうだったな。

ゼン先生：忘れてたんじゃないですか？

小越先生：そんな細かいことを覚えているはずがない。脳の記憶領域が小さくなっているんだから。

ゼン先生：それは私もですが……。そうそう、フジメディカル出版から「カテーテル関連血流感染症」という本を出版しました。副題が「CRBSIの予防と対応」です

小越先生：そうか。ついに、だな。クラウドファンディングで助けてもらったんだっとな。

ゼン先生：そうです。37冊にサインをしました。ありがとう、ありがとう、と言いながら書きました。

小越先生：その気持ちは通じているはずだよ。

ゼン先生：出版までに時間がかかりました。最初の原稿を完成させて出版社に渡したのは、2024年の6月ですから。

小越先生：1年がかりか。まあ仕方ないんじゃないか？

ゼン先生：そうですね。とにかく出版できたので。大手出版社に出版を依頼したら、売れない本は出版できないと断られたと思います。「脂肪乳剤ナビゲータ」は照林社に断られました。売れないから。フジメディカル出版が「必要な本だから」と言って出版してくれたんです。

小越先生：ありがたいことだ。本当によかったな。

ゼン先生：出版されて、すぐに読み返しましたが、数か所、間違いがあって、正誤表を作りました。

小越先生：それは仕方ない部分もあるよ。オレの「静脈・経腸栄養の発展を思い出すまでに」だって、出版してすぐに間違いを見つけたよ。

ゼン先生：そうでしたね。先生から送っていただいた本の中に入れていただいた手紙にそう書かれていました。

小越先生：たくさん売れて、第2刷で訂正することができたらしいのになあ。

ゼン先生：そんなに売れないと思います。感染管理専門看護師さんが買ってくれたらうれしいんですけど。でも、自分で読み返してみて、言いたいことはほぼ網羅していると思いました。

小越先生：そうか。そう思えることが一番だよ。

ゼン先生：ありがとうございます。

小越先生：静脈栄養とカテーテル管理の話に移ろうや。

ゼン先生：はい。6月に高崎総合医療センターと佐賀NSTで講演させてもらったんですが、どちらも「静脈栄養とカテーテル管理、CRBSI予防対策」についての内容にして欲しいと言われました。

小越先生：ほほう。珍しいんじゃないか？

ゼン先生：依頼してくれたのが、高崎は小川先生、佐賀は山内先生なので。

小越先生：二人ともちゃんとわかっているからな。

ゼン先生：その通りです。私としてもうれしい依頼でした。PICC



↑ポスター会場での発表の様子です。気楽すぎる？でも、言いたいことは伝わったと思っています。聞いてくれた方も多かったんじゃないかなあ。そうそう、長谷部先生が来てくれました。小さくですが、写っています。あとで、一緒に昼食を食べました。いろいろ話を聞かせていただきました。お元気でした。つつかしい話をいっぱいしました。



↑企業展示会場です。うろうろ、ウロウロしました。なんと云いますか、カテーテル関連血流感染症対策の器具などは、本当にマイナーです。栄養関連の製品や器材はほとんどありませんでした。環境感染の領域では、栄養なんて……。なのでしょう。



↑吉野ヶ里遺跡です。すごく広い、すごく整備された公園です。夏は、本気で熱中症対策を講じてから行ってください。と考えると、涼しくなっから行くのがお薦めです。



↑JRで吉野ヶ里公園駅まで行き、そこから徒歩で吉野ヶ里歴史公園まで歩きました。あと700mから始まって、あと650mなどの案内板を見ながら歩きました。暑い！熱い！駅にはタクシーがいました。マスコットキャラクターの「ひみか」と「やよい」が案内してくれました。暑かった！

の講演も結構、たくさんやってきましたが、最近は挿入技術の話は少しだけにして、管理内容について、を中心にしています。

小越先生：その方針は正しいと思うよ。誰もかれもが、PICC については挿入技術にばかり興味があるんだろう？

ゼン先生：そう思います。PICC の講演会の内容は、エコーガイド下でこんな風に挿入するんだ、ですから。

小越先生：大事なのは維持期の管理なのになあ。

ゼン先生：そうです。PICC は感染率が低いと思いついて入る人が多いんです。本当は感染率は低くないのに。というか、現在の考え方で管理したら、感染率は高くなってしまいます。それもわかっていない。

小越先生：どんな輸液を投与するのかを考えなさい、だな。

ゼン先生：そうです。PICC から PPN 輸液を投与したら感染率が上がる、それが理解できていないんです。

小越先生：あれほど口を酸っぱくして言っているのに。

ゼン先生：7 月には、横浜で開催された、第 40 回日本環境感染学会で発表してきました。

小越先生：また横浜か。どんな発表をしたんだ？

ゼン先生：ニードルレスコネクタ (needleless connector : NLC) の消毒方法についての発表です。ポスター発表でした。

小越先生：へええ、君がポスター発表か。

ゼン先生：そうなんです。気楽に発表してきました。私のポスターは、A4 の紙に印刷したものを貼ったんですが、他の方々は、広い 1 枚物のポスターでした。1 万円以上するはず。立派なポスターばかりでした。1 枚物じゃなかったのは、私だけだったように思いました。私ののは無料です。

小越先生：手抜きじゃないのか？

ゼン先生：そんなことはありません。ちゃんと言いたいことが理解できるようなポスターだったと思います。ちょっとは手抜きしたかもしれませんが、ちょっと、だけです。

小越先生：どうせ、そんなことだろう。どんな内容なのか、簡単に説明しなさいよ。

ゼン先生：NLC の接続面の消毒をどうするか、です。日本では、CDC ガイドラインが「スクラブ、scrub、擦れ」と言っているの、「15 秒間、擦るのが正しい方法だ」という雰囲気なんです、15 秒って、長い。

小越先生：確かに。同じ動作を 15 秒続ける、それは長い。

ゼン先生：もしも亀よ亀さんよ、世界のうちでお前ほど、歩みののろいものはない、どうしてそんなにのろいのか。

小越先生：それはなんだ？

ゼン先生：ちょっと早口でこの歌を歌いながらやると 15 秒になるらしいです。

小越先生：へええ、面白いじゃないか。ちょっとレベルが低いかもしれない、とは思っただけ。

ゼン先生：私もそう思います。15 秒は長いから、ということで、実際には数秒しか擦らないようになっただけもしているそうです。まったく消毒しない看護師さんもいるそうです。

小越先生：なるほど、そうだろう。手抜きの方向に進むはずだ。



↑ ボランティアガイドについて説明を聞きながら回りました。私はシルバーなので料金は 200 円。山内くんの半分以下でした。全員が帽子をかぶったり傘を差したりしているのです。ボランティアのおじさんがかぶっている陣笠ですが、この日は貸出中止だったのです。残念。陣笠を借りて歩いたら、もっと楽しかったのに。



↑ 炎天下の観光でした。ひたすら歩く、歩く。暑かったけど、吉野ヶ里遺跡をちゃんと観光できてよかったです。山内先生、ありがとう。



↑ 左は教育講演の時の山内先生です。吉野ヶ里遺跡観光中の山内先生。準備万端です。私？講演の時のままで歩きました。山内先生のポロシャツは、ミャクミャクです。大好きなんだそうです。私には理解不能でした。



↑ 鳥居です。鳥が居るから鳥居だとの説明。2 羽いると「ニトリ」、3 羽いると「サントリー」だ。ボランティアのおっちゃんが言っていました。

ゼン先生：そこで、SSR3 回法という方法を提案したんです。

小越先生：なんだ、その、SSR3 回法というのは。

ゼン先生：Strong-Straight-Rotate です。NLC の接続部表面を、酒精綿で、一方通行的に 3 回、強く擦って (Strong-Straight-Scrub)、酒精綿の別の面で周囲を 3 回、ぐるぐると消毒する (Rotate)、という方法です。これを 5 秒程度でやりなさい、なんです。

小越先生：へええ、それを提案したのか。

ゼン先生：はい。この方法でやると、NLCの表面に付着させた 10^3cfu のセラチア菌を完全に除去できた、というデータを発表しました。

小越先生：いい内容じゃないか。しかしな、3回じゃなくて、2回ではダメなのか？

ゼン先生：そういう質問は来るんですが、「わかりません。私は、この SSR3 回法という方法でやったらこういう結果が出ました。2回でどうなのか、4回でどうなのか、どうぞ、自分で検討してください。」と答えるようにしています。3回と3回、これで「決め打ち」したんです。

小越先生：なるほど。「決め打ち」か。

ゼン先生：ポスター発表の時に、SSR3 回法の実際の動画も見せたので、結構、興味をもってくれた人が多かったような気がしているんです。

小越先生：ポスター発表で動画を見せた？いいのか？

ゼン先生：いいんじゃないですか。司会の看護師さんがよくわかった、と言ってくれましたし。

小越先生：そうか、それならいいよ。

ゼン先生：この SSR3 回法を全国に広めたいと思っています。

小越先生：そうか。NLCの消毒の時、誰もが「エスエスアアル サンカイホウ」と言ってやるのか。「エスエスアアル サンカイホウ」「エスエスアアル サンカイホウ」か。いいんじゃないか。

ゼン先生：先生もそう思っていただけますか？

小越先生：・・・まあ、日本中で統一した方法でやってみて、データを出してくれたらいいと思うよ。信頼性が高まるから。

ゼン先生：そのうち、CDCも真似したりして。

小越先生：英語で論文を発表しなさいよ。

ゼン先生：誰か、大規模な研究をして、英文論文にしてくれたらいいんですけど。

小越先生：そうだな。

ゼン先生：ところで、私のポスターのセッションでは、カテーテル関連血流感染症の発表が多かったんです。カテーテル関連血流感染症は CRBSI (catheter related bloodstream infection) なのですが、CLABSI (central -line associated bloodstream infection) という用語のほうがよく使われています。間違いなんです。CLABSI はサーベイランス用の定義です。診断には CRBSI を使うべきなんです。金沢医大の感染症の飯沼教授に確認しました。

小越先生：感染症の飯沼教授の言うことなら正しいだろう。

ゼン先生：はい。20 年来になりますか、長くお付き合いをさせていただいていますし。それから、感染管理の看護師さん達の発表は手技的な内容が多くて、投与する輸液はほとんど気にしていないんです。



↑ 左：佐賀駅で佐賀の写真を撮りました。右：佐賀バルーンミュージアムへ行く道には、このような銅像がたくさんありました。佐賀の偉人です。銅像の真中が鍋島直正、佐賀藩 10 代藩主。西洋の科学技術を積極的に導入し、佐賀藩を雄藩へと躍進させた方です。明治維新は、実は、佐賀藩が薩摩・長州の側につかなければ達成できなかったはずだそうです。



↑ 銅像だけでは、誰が誰か、わかりません。足元に名前が記載されています。左から、大隈重信、副島種臣、江藤新平、大木喬任、です。4 人とも有名です。私は知っていますよ。



↑ 左から、伊東玄朴（蘭方医）、相良知安（日本にドイツ医学を導入した）、枝吉神陽（知らないんです）、佐野常民（日本赤十字社の創始者）、島義勇（北海道開拓の父）。



↑ 佐賀バルーンミュージアムの紹介映画を写真に撮りました。撮影禁止となっていたのですが、私一人しかそこにいなかったし、写真を撮って、ここで紹介したらミュージアムの宣伝にもなるじゃないか、と勝手に解釈して、たくさん写真を撮ってしまいました。いいですね。見に行きたいと思ったのですが、天候によっては、5 日間、全然気球が飛ばせられない時もあるのだそうです。5 日間、ずっと佐賀に滞在するという予定で来ないとダメだとタクシーの運転手さんに言われました。

小越先生：やっと輸液の汚染の話に戻ったな。突然、SSR3 回法に話題が移ったから、ずっと SSR3 回法で行くのかと思っていたよ。

ゼン先生：すみません。

小越先生：感染管理の看護師さん達の興味は、そっちなのか。輸液の感染が一番大事だとオレも思っているんだが。

ゼン先生：そうなんです。輸液が汚染したらどうなるか、それが CRBSI の予防には大事です。特に PPN 輸液では。でも、感染症の方々は、輸液の汚染についてはあまり興味がないんじゃないかと私は思っています。

小越先生：それは、静脈栄養自体に興味がないということなんじゃないか？

ゼン先生：そうだと思います。そこが非常に大事です。静脈栄養に興味がないんだと思います。何のために静脈内留置カテーテルを使うのか、そこがきちんとしていないんですよ。静脈栄養を実施するためにカテーテルを使うんです。

小越先生：要するに、静脈栄養をするのか、単に電解質輸液や薬剤を投与するだけなのか、そこだな、ポイントは。

ゼン先生：カテーテルを使う目的によって、感染リスクも変わるし、管理方法も変わるんですけどね、そこには関心がないような気がしています。

小越先生：高崎と佐賀での反応はどうだったんだ？

ゼン先生：佐賀では、講演後にはそういう話はしなかったんですが、高崎の感染管理の看護師さん達、知らない内容が多かったようです。講演内容が勉強になったと言ってくれていました。

小越先生：君の講演内容って、そんなに、突拍子もない内容じゃないだろう？

ゼン先生：もちろんです。すべて論文にしている内容です。

小越先生：論文が読まれていないんだな。

ゼン先生：読まれていないというか、読んでいないんですよ。

小越先生：そうか、読んでいないんだ。

ゼン先生：輸液ラインのフィルターには、対称膜と非対称膜がある、という話もしたんですが、誰も知りませんでした。このデータは 2008 年に論文にして発表しているんですけど。

小越先生：もう、古いデータになっているからかなあ。

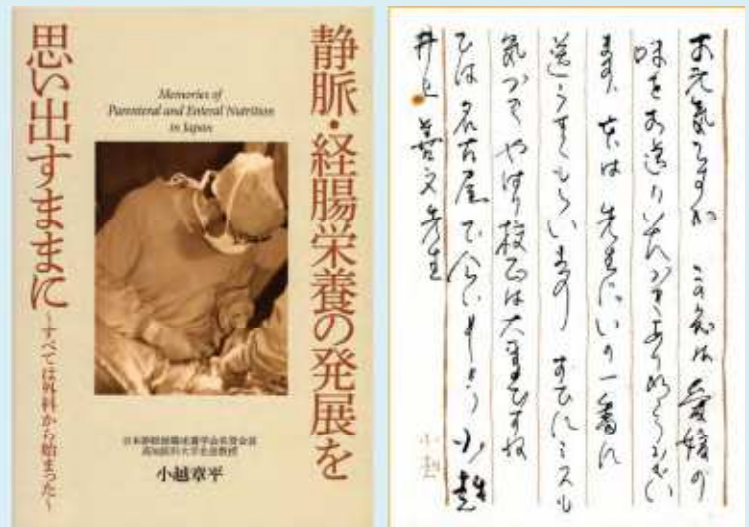
ゼン先生：輸液が汚染するとどうなるか、それも講演で話したんですが、知らなかったという人が多かったようです。

小越先生：例の、輸液ラインの導入針を輸液に差し替える時の汚染についても話したんだろう？

ゼン先生：もちろんです。でも、ほとんど知られていません。これも、もちろん、論文にして報告しています。

小越先生：なんか、きちんと論文を読んで、自分で考えるという活動をしている人が少ないんじゃないか？

ゼン先生：私もそう思っています。こんな言い方をすると申し訳ないんですが、看護師さん達、CRBSI に関しては、CDC のガイドラインだけを知っていたらいい、そんな感じになっ



↑ 小越先生の本。随筆的に書かれた本で、日本の臨床栄養の歴史がわかります。私は何度読んだかなあ。出版された時にいただいた手紙です。「本は先生にいの一番に送らせてもらいます」この一言は私の宝物です。

ているんだと思います。全国的な傾向のはずです。

小越先生：CDC、CDC か。

ゼン先生：CDC が全部正しいのではないと言っているんですけど。何度言ってもだめなんです。さすがにアメリカは強いです。

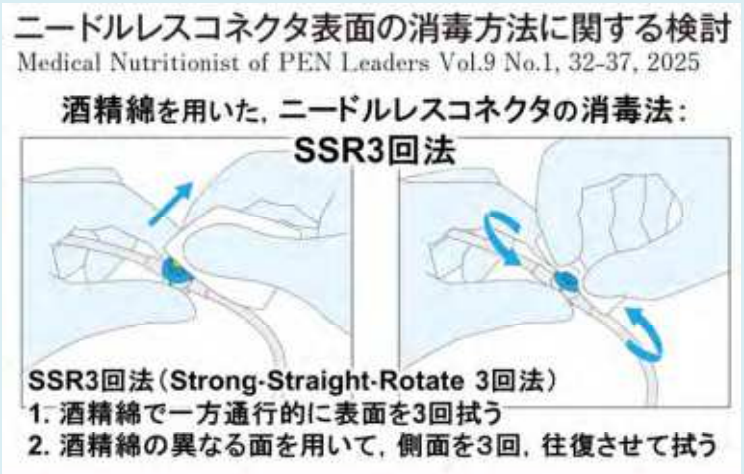
小越先生：トランプが大統領になる国だからな。

ゼン先生：それはそれ、ですけど。もう一つ大事なのは、静脈栄養をやると感染するから、という理由で、できるだけ静脈栄養はしないほうがよい、という考え方になっている人が多いんです。きちんとした感染対策をしていないくせに。

小越先生：本当はそこが問題なのに、な。

ゼン先生：そうなんです。本末転倒です。感染するから静脈栄養はやらないほうがよい、そうじゃないんです。静脈栄養が必要だ、感染しないように静脈栄養を実施しなければならない、これが正しい考え方なのに。感染するから静脈栄養はダメ、そうなっています。

小越先生：困ったことだなあ。今度の本では、そこも強調しているんだろう？



↑ この SSR3 回法を、NLC 表面の消毒法の標準として日本中に広めたいのです。そのためにこの実験をしました。

ゼン先生：もちろんです。静脈栄養自体、栄養管理全般についても解説しています。

小越先生：全体で何ページの本なんだ？

ゼン先生：目次や索引も含めると 331 ページです。

小越先生：それは膨大な量だな。全部読むのは大変だぞ。

ゼン先生：章ごとに読んでもらえばいいんですが、読みやすいように、写真もたくさん入れています。きれいな写真です。貴重な写真もありますから、スキャンして、講演なんかで使う人が出てくるでしょうね。

小越先生：それは、当然ではないけど、当然だろうな。

ゼン先生：いいんですけど。井上善文の本に掲載されているものだと言って欲しい、それは思います。でも、写真や記事、使ってもらうのはうれしいことです。カテーテル関連血流感染症に興味を持つ人が増える可能性がありますから。

小越先生：そうだな。そういう意味では、この本の出版がカテーテル管理に、ひいては静脈栄養に対する関心を高めしてくれるとうれしいよな。

ゼン先生：そう思っています。実は、読みやすいように、山田さんとの「カテ問答」を組み入れているんです。会話しながら解説しているんです。

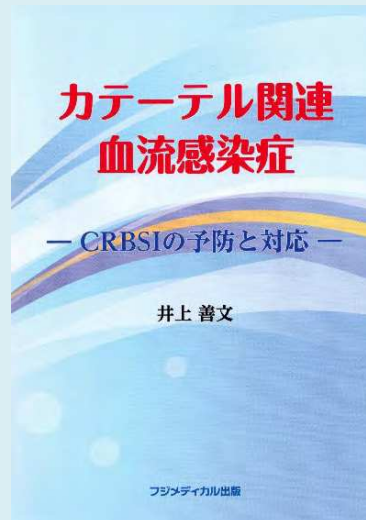
小越先生：「問答」か。「問答」って、相当古い表現だぞ。それに、あの兵庫医大の看護師だった、山田繁代さんか。

ゼン先生：ハイ、そうです。

小越先生：それは、面白い会話になっているんだろう。読みやすくする、工夫か。

ゼン先生：ハイ。山田さんも喜んでくれています。

小越先生：それはよかったな。オレも読むよ。



←クラウドファンディングで、たくさんの方に応援していただいて出版することができました。ありがとうございました。大手出版社なら出版を引き受けてくれなかったと思います。売れない本は出版できない、ですから。本当は、たくさんの人に読んでいただきたいのですが、カテーテル関連血流感染症の 300 ページもある本を読んでくれる人がどれだけいるのでしょうか。そういうことで、応援をお願いしました。本当にありがとうございました。私としては、どうしても出版したかった本なのです。是非、読んでください。できたら買って欲しいですね。



〈カテ問答 1〉感染するから静脈栄養はできるだけ実施しないようにしている！？

ゼン先生：308号室の佐藤さん。昨日、食事を開始したんでしょう？ どうですか、結構食べていますか？

山田看護師：それが、あまり食べられていないんです。食欲がない、味がしない、そんな様子です。

ゼン先生：そうですか。大きな手術だったし、背後もいろいろしんどい思いをしたので、仕方ないかもしれません。

山田看護師：そうですね。やっと食事が食べられるような段階まで回復した、という感じですから。

↑ この本の目玉と言っているかもしれません。カテ問答として、看護師の山田さんとゼン先生が、好き放題に思い切りしゃべっています。

【今回のまとめ】

1. 夏です。暑すぎる、熱すぎる夏です。気温が 40℃を超えます。生命が脅かされる熱さです。日本はどうなるのでしょうか。日本最高気温が更新されました。41.2℃です。
2. 千里金蘭大学の「臨床栄養勉強会」がサンケイ新聞の教育欄で紹介されました。適切な内容にしてくれています。「できるだけ経口栄養を選択するべきと思い込んでいたので、目からうろこが落ちた。」との感想も記載されています。
3. 感染するから静脈栄養はやらないほうがよい、そうじゃないんです。静脈栄養が必要だ、感染しないように静脈栄養を実施しなければならない、これが正しい考え方です。
4. 感染対策の専門家の方々は、どうして輸液の汚染について関心がないのでしょうか。CRBSI の基本は輸液を、静脈栄養を理解することです。
5. CRBSI 予防対策として、NLC 表面の消毒法を提案しています。SSR3 回法、実践してください。
6. カテーテル関連血流感染症—CRBSI の予防と対応—を出版しました。購入して読んでください。